

2015年3月28日 KJFC ジャズカントリー例会

ジャズ・ワンホーン・トランペットの魅力について

紅 我蘭堂

まずは「ジャズカントリー」様の再オープン、おめでとうございます。そして KJFC 例会再開の1回目を担当させていただく名誉を頂戴しまして、ありがとうございます。

とはいえ、今日は久しぶりの「あなたも一日ジャズ喫茶マスター」ということで、かなり乱暴なやり方でまいります。

今回は私の数少ない持ちレコードの中からワンホーン・トランペットを紹介しましょう。

そもそもフリーゲルホーンなどを含むトランペットのワンホーン・アルバムは少ないです。どれほど少ないかというと、ヴォーカルやビッグバンドなどを含めたすべてのジャズ・アルバムを広大な銀河系宇宙に例えると、それはそれは小さな小さな M78 星雲くらいなものです。しかしそこにはウルトラモーガンやウルトラドーラム、ウルトラミッチェルなどなどの屈強な一騎当千の強者がいて、あの退治しても撃退してもしぶとく復活してくる邪悪な妖怪獣アヴァンギャルド一族。時には愛想があるフュージョン星人、何故か一部には人気があるエレピやエレベ、シンセサイザーなどのエレキング軍団などから、ハードバップをこよなく愛する善良なおじさんおばさん達を守ってくれています。

サクスのワンホーン・アルバムは、それこそジョン・コルトレーン(ts)・カルテット、ソニー・ロリンズ(ts)、デクスター・ゴードン(ts)、ハンク・モブレイ(ts)などなど数え切れないほどあります。

ワンホーン・トランペットが少ない訳を愚考しました。

1. オーソドックスな5人編成のクインテットに比べて、トランペット類1本では音楽の広がり得にくい。そこでトランペット・プレイヤーの演奏比重が増えて、よっぽどの達人でなければ良い内容が得られない。
2. 同じ意味で、これを支えるバックのメンバー、特にアドリブ・ソロ演奏を披露しなければならぬピアニストの技量が問われます。

というのが最低限の理由かと思います。その証左にデクスター・ゴードンやコルトレーン、ソニー・ロリンズなど好んでワンホーン・カルテットでレコードを残したサクス・プレイヤーに比べて多くのトランペッターは生涯に1枚くらいしかワンホーン・アルバムを残していないです。

素人の勝手な憶測ですが、トランペット類やトロンボーン等の金管楽器は、楽器の性格上、サクス類の木管楽器に比べて、肺活量やその他の肉体的は理由によって長時間の演奏には不向きかと思いました。この疑問を、吹奏楽をやっている、時にはアマチュア・ピ

ッグバンドで演奏している知り合いのトランペッターに質問してみましたが、「そんなことはない」と否定されてしまいました。ワンホーン・アルバムが少ないことは、やはり単なる偶然かもしれません。

今回の特集を進めている最中に気がついたことがあります。それは、あの名門ブルーノート・レーベルにおいて極端にトランペット・ワンホーン・アルバムが少ない事です。というか絶滅危惧種に等しく、例のハードバップの黄金リストといわれている 1500 番台・4000 番台における私が知る範囲では、ディジー・リース盤とリー・モーガン盤しかありません。あの名プロデューサーであるアルフレッド・ライオンをしてであります。駒が不足していたのでしょうか？ いえいえドナルド・バードやフレディ・ハバード、はたまたサド・ジョーンズなど錚々たる新進気鋭がそろっていた、あのブルーノートがです。ところがピアノ・トリオ盤は、少ないといっても結構あります。まあスリー・サウンズは別格としても、バド・パウエル、ホレス・シルバー、ユタ・ヒップ、ソニー・クラーク、デューク・ピアソン、ホレス・パーランなどのリーダー・アルバムがばっと思いつきます。すごい格差です。それでも、ピアノ・トリオ盤もブルーノートにおいては少数派といえるでしょう。が、ライオンの気持ちも分からないことはないです。やはりトランペットのワンホーン、もしくはピアノ・トリオでは音楽の構成、広がりが薄いと感じたのでしょうか。

他の奏者が少ない分ピアニストに掛かる比重が多くなります。場面によってはピアノ・トリオの演奏を聴くようなものです。トミー・フラナガン、レッド・ガーランド、ウイントン・ケリー、^{そうそう} 錚々たる^{てだけ}手練の面々がバックアップあるいはピアノ・トリオとして演奏しています。今日はピアニストもじっくりと聴いていただければ幸いです。そうです、今日は私の大好きなピアニスト特集も伏線としています。

なお、本日はご紹介するアルバムは「一家に一枚」的なレコードが中心ですが、中には珍盤もあります。ご自分のコレクションの再発見に貢献することができたら、更なる幸いです。

※このレポートの記述は、あくまでも個人の感想であり、事実関係などにはまったく関知いたしません。

※誤字・脱字、不適切および不愉快な表現はご容赦ください。

【王道のアメリカ・ハードバップ編】



CANDY/LEE MORGAN (BLUE NOTE BLP590)

LEE MORGAN(tp)、SONNY CLARK(p)、DOUG WATKINS(b)、ART TAYLOR(ds)

SIDE 1) 1. CANDY 2. SINCE I FELL FOR YOU 3/C.T.A.

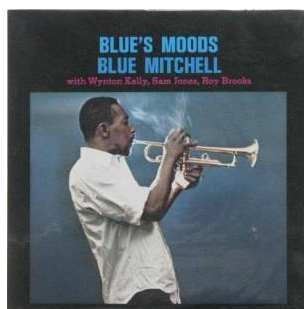
SIDE 2) 1. ALL THE WAY 2. WHO DO YOU LOVE I HOPE
3. PERSONALITY

ブルーノート・レーベルのオーナーであり、プロデューサーで

あったアルフレッド・ライオンはサクソにしろトランペットにしろワンホーンでのアルバムを極力避けていたのではないかと思います。それは何度も書くように、音楽の広がり
がワンホーンより、2管あるいは3管のほうがより大きいと思ったのでしょうか。その考えは
間違っていない。いまでも少々極端であったのではないかと感じます。またまたよく
調べもしないで述べると、このレーベルでワンホーン・アルバムを許されたのはサクソ
ではソニー・ロリンズ、デクスター・ゴードン、ルー・ドナルドソン、ハンク・モブレイ。
トランペットでは、このリー・モーガンとディジー・リースだけかな？ 確かトロンボ
ーンのカーティス・フラーがアルバムの中で1,2曲ワンホーンの曲を収録していたはず。

少ないといえるピアノ・トリオ物より、更に少ない。下手をすればオルガンのジミー・
スミスの総アルバム数より少ないと思います。
まあ、そのこだわりがあってこそブルーノートがモダンジャズ界で名門といわれる所以で
すが。

さて、このアルバムについて私が^{うんぬん}云々かんぬんすることは、たとえジャズの神様がにっ
こり笑って「いいのよ」と仰られても許されることではありますまい。ただ私の印象は、
例えていうのも変ですが、甲子園の優勝投手とこのリー・モーガンがダブってしまいます。
弱冠19歳の少年が、荒削りながらも時速160kmに近い剛速球をびしびし投げ込んで、
時としてはスローカーブで緩急を付けながら頂点に立った。もちろんチームメイトも素晴
らしかった。キャッチャーであるソニー・クラークの好リードも光ったし、ワトキンスや
テイラーなどの内野外野のファインプレイにも助けられた。やがてこの少年は、メッセン
ジャーズという球団にドラフトされて、エースに育っていく。という印象がどうしても残
ります。この、一家に一枚的な大名盤に対して、なんと不遜な妄想なことか。



BLUE'S MOODS/BLUE MITCHELL (RIVERSIDE RLP 9 3 3 6)

RICHARD "BLUE" MITCHELL(tp)、WYNTON KELLY(p)、
SAM JONES(b)、ROY BROOKS(ds)

1960年8月24日、25日 NEW YORK で録音

SIDE1)1.I 'll CLOSE MY EYES 2.AVARS 3.SCRAPPLE
FROM THE APPLE 4.KINDA VAGUE

SIDE2)1.SIR 2.WHEN I FALL IN LOVE 3.SWEET

PUMPKIN 4.I WISH I KNEW

このレコードの悪口を言う人と出会ったことがありません。私も大好きですし、これか
らジャズを聴きたいという方に無条件でお薦めしています。小ざかしいノーガキや屁理屈
は抜きにしてハードバップ・ジャズの魅力に浸りましょう。今日は時間が許す限り B 面を
中心に掛けさせていただきます。



QUIET KENNY/KENNY DORHAM(NEW JAZZ <PRESTIGE> 8225)

KENNY DORHAM(tp), TOMMY FLANAGAN(p), PAUL CHAMBERS(b), ART TAYROR(ds) 1959年11月13日録音

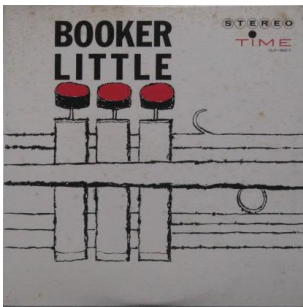
SIDE 1) 1.LOTUS BLOSSOM 2.MY IDEAL 3.BLUE FRIDAY 4.ALONE TOGETHER

SIDE 2) 1.BLUE SPRING SHUFFLE 2.I HAD THE CRAZIEST DREAM 3.OLD FOLKS

誰しもが好きなアルバムを持っているでしょう。好きな理由は千差万別としても、何らかの訳はあります。私がこのレコードに思い入れを持っているのは、内容の素晴らしさもさることながら、録音日にあります。ちょうど私の6歳の誕生日に録音されたこのアルバムは、何よりのバースデー・プレゼントとなりました。

そしてピアニストは、またまたトミー・フラナガンです。なんと評したらよいのでしょうか。小粋で小洒落たフレーズを紡ぎだすナイスガイとしか言いようがありません。スポーツマンでないですが、名盤率の高いピアニストです。

お約束の「蓮の花」が入っているA面ではなく、本日はB面のおいしいところをお聴きください。



BOOKER LITTLE/BOOKER LITTLE (TIME)

BOOKER LITTLE(tp), TOMMY FLANAGAN(p)A1,A2, B2,B3 WYNTON KELLY(p)A3, B1 SCOTT LaFARO(b) ROY HAYNES(ds)

SIDE1)1.OPENING STATEMENT 2.MINOR SWEET
3.BEE TEE' S MINOR PLEA

SIDE2) 1.LIFE' S A LITTLE BLUE 2.THE GLAND VALSE

3.WHO CAN I TURN TO 1960年4月13日、15日録音

ジャズメンで、せめてあと5年か10年は生きてほしかったという、夭折した人は多いです。ブッカー・リトルはその中の最たるもので、せめて、あと10年は生存して少なくとも10枚以上のレコードを残してくれれば、ジャズシーンは大きく変わっていただろうと思います。というか、そんな大げさなことでもっともっとブッカー・リトルのジャズを聴きたかったです。



ART/ART FARMER(ARGO 678)

ART FARMER(tp) TOMMY FLANAGAN(p) TOMMY WILLIAMS(b) ALBERT HEATH(ds) 1960年録音

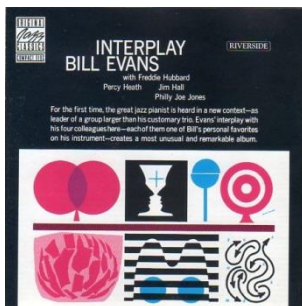
SIDE 1) 1.SO BEATS MY HERAT FOR YOU 2.GOODBYE

OLD GIRL 3.WHO CARES 4.OUT OF THE PAST

SIDE 2) 1.YOUNGER THAN SPRINGTIME 2.THE BEST THING FOR YOU IS ME
3.I'M A FOOL TO WANT YOU 4.THAT OLD DEVIL CALLED LOVE

この盤を聴いているとアート・ファーナーは本当に上手いトランペッターだと、しみじみと思います。しかしながらファーナーの評価というかジャズファンの中での立ち位置は微妙です。上手いけれど、何かもうひとつ食い足りない、というところが本音ではないでしょうか。確かにファーナーには佳作と呼べる自己名義のアルバムは沢山あります。ありますが、ではどれがベスト・アルバムかといわれれば、この盤がいいかなという程度ではないでしょうか。またブルーノートやプレステッジなどにも多くのアルバムにサイドメンとして参加しています。おそらく歴代トランペッターの人気投票をしても、ベスト20に入るかどうかというところかと思います。

でもファーナーの名誉のために言っておきます。あの、日本人がこよなく愛するソニー・クラーク (p) の畢生の大名盤「クール・ストラッティン」(ブルーノート)のトランペッターはファーナーであります。



INTERPLAY/BILL EVANS (RIVERSIDE)

BILL EVANS(p), FREDDIE HUBBARD(tp), JIM HALL(gu),
PERCY HEATH(b) “PHILLY” JOE JONES(ds) 1962年録音

SIDE 1 1.YOU AND NIGHT AND THE MUSIC 2.WHEN
YOU WISH UPON A STAR 3.I'LL NEVER SMILE
AGAIN

SIDE 2 1.INTERPLAY 2.YOU GO TO MY HEAD 3.

WRAP YOUR TROUBLES IN DREAMS

様々なトランペッターを紹介している本日。フレddie・ハバードの出番がないのは、片手落ちのそしりを免れません。ただし、如何せんこの人はハードバップ・ジャズの王道をたどってきた人だけに、私が持っているレコードもクインテット以上の編成が圧倒的でワンホーンがない。苦しまぎれが本音だけど、大好きな曲を2曲掛けます。

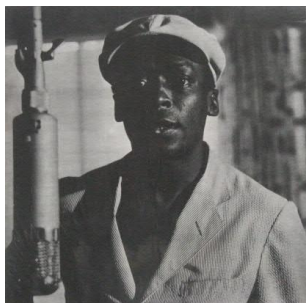
世間では私は、ビル・エヴァンスなど聴いていないと思い込んでいる人が大勢います。それは大きな間違いです。私もエヴァンスは聴きます。「ワルツ・フォー・デビー」も「ポートレイト」も持っています。世間ではエヴァンス (知性派) v s ガーランド (享楽派) という構図が大好きなようで、好みがどちらかに偏るだろうということが好きなようです。どうも日本人は「〇〇派」「△△流」など、系統を付けるのが好きな民族です。

いつも思うのですが、例えば中華料理を食べるときに、ワンタンメンでも中華丼でも同じ中華じゃないですか。単に好みの問題かなと思います。

このレコードについては、私が能書きを垂れる必要はないと思います。全編を通じてジャズの魅力が溢れています。ひとことハバードについて言えば、有名なA面もいいですが、B

面もよいです。特にエヴァンスが本当に聴かせたいと意図したであろうタイトル曲でのミュート・プレイは、本来ミュートがそんなに好きでない私も納得できます。

あと、やっぱりドラムスのフィリー・ジョー・ジョーンズは名手です（蛇足）。



THE MUSINGS OF MILES/MILES DAVIS(PRESTIGE 7007)

MILES DAVIS(tp), RED GARLAND(p), OSCAR PETTIFORD(b), PHILLY JOE JONES(ds) 1955年6月7日
録音

SIDE 1) 1.WILL YOU STILL BE MINE? 2.I SEE YOUR FACE BEFORE ME 3.I DIDN'T

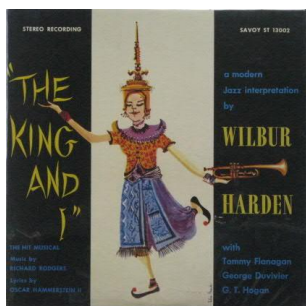
SIDE 2) 1.A GIRL IN CALICO 2.A NIGHT IN TUNISIA

3.GREEN HAZE

ガーランドというピアニストは、相当に偏屈だったか頑固者だったに違いないです。あるいは大勢の他人と共同作業ができない精神構造だったと感じます。何故かと言うと常々言っているように、ホーン奏者との競演盤はほとんどうまくいっていません。ホーン陣をバックアップしようという気が薄いです。やはりピアノ・トリオでペアペア演奏しているほうが気楽だったのでしょう。そんなガーランドですが、マイルス・デイビスとジョン・コルトレーンだけにはうまく合わせていたように感じます。

またある時期マイルスがこよなく尊重したのがガーランドでありました。よく調べもしないのに断言してしましますが、マイルスのおそらく生涯でたった1枚のワンホーン・アルバムでした。

【アメリカのちょっぴりマイナーな人たち編】



THE KING AND I/WILBUR HARDEN (SAVOY SST13002)

WILBUR HARDEN(tp)、TOMMY FLANAGAN(p)、GEORGE DUVIVIER(b)、G.T.HOGAN(ds)

SIDE 1) 1.GETTING TO KNOW YOU 2.MY LOAD AND MASTER 3.SHALL WE DANCE 4.WE KISS IN A SHADOW

SIDE2) 1.I HAVE DREAMED 2.I WHISTLE A HAPPY

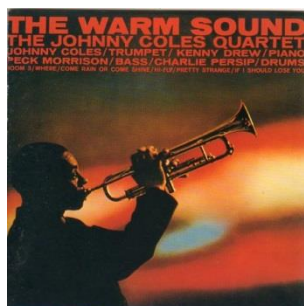
3.HELLO,YOUNG LOVERS 4.SOMETHING WONDERFUL 1958年9月23日、30日
録音

王様と私。美しいバラード集です。過去ミュージカル映画を素材にしたジャズレコードは沢山ありますが、これは私が好きな1枚です。目をつぶって聴くと映画の1シーンが思い浮かべられます。王様役のユル・ブリンナーと家庭教師役のデボラ・カー。残念ながらカーの歌声は吹き替えだったらしいですが、映像の美しさも相まって、記憶に残る映画です。

いまでもプリンナーがぎこちなくダンスを踊るシーンが目には浮かびます。「ワン、ツー、スリー、ハッ！ ワン、ツー、スリー、ハッ！」

このレコードはジャズ・ミュージカル盤史上の傑作が出来あがりました。なお、どう聴いてもトランペットではなくフリーゲルホーンだと思います。少しハスキー気味な音色です。

ウィルバー・ハーデンは地味なトランペッターです。サヴォイ・レーベルに数枚のリーダー・アルバムを残しています。私が知る限りではジョン・コルトレーンとの共演盤をサヴォイとプレステッジに残しています。コルトレーンの熱心なファンでなければ思い浮かばないトランペッターです。私の場合はレッド・ガーランドがコルトレーンと共演していた盤で知りました。上手いプレイヤーだと思うのだが、残されたレコードは少ないです。しかもサヴォイ盤は本来自分のリーダー名義であるはずなのに、コルトレーンがリーダーになってしまっています。「メインストリーム1958」「メインストリーム1958 Vol.2」というアルバムです。プレステッジ盤は、少なくとも正規発売されているアルバムが3枚あります。あの「スターダスト」(PR7268)、「スタンダード・コルトレーン」(PR7243)、「バヒア」(PR 7353)です。



THE WARM SOUND/JOHNNY COLES (EPIC)

JOHNNY COLES(tp)、KENNY DREW(p)、PECK MORRISON(b)、CHARLIE PERSIP(ds) 1961年4月録音
SIDE 1) 1.ROOM 3 2.WHERE 3.COME RAIN OR COME SHINE
SIDE 2) 1.HI-FLY 2.PRETTY STRANGE 3.IF I SHOULD LOSE YOU

エピック・レコードといえば、1980年代にはマイケル・ジャクソンやワム、シンディー・ローパーなどのロック、ポップスなどでメジャーになったレーベルです。でも50年代から60年代にかけてはハードバップ・ジャズファンにとって目が離せないレーベルでした。

さてジョニー・コールズは地味なプレイヤーです。私が知る範囲では今日紹介する2枚のレコードの他に、ブルーノートにもリーダー・アルバムを1枚残しています。そちらはアルトサックスのレオ・ライトとテナーサックスのジョー・ヘンダーソンと共演している典型的なハードバップ・アルバムです。良い意味で弾けた演奏が聴かれます。ここでのコールズは、お聴きいただけると分かりますが、よく言えば、少しかすれ気味で抑制されたフレーズ。悪く言えば特徴が薄い演奏かと私は感じます。それこそ大向こうをうならせるような派手な演出や、いわゆる“決めセリフ”的な節回しも目立ちません。でもそこが良いところなのでしょう。チャールス・ミンガスのバンドにも在籍していたようなので、もっとハードな人かと思っていました。

乱暴な言い方をすると、このレコードはリズム・セクションに注目するレコードです。

特にドラムスのチャーリー・パーシップが、こんなに切れきれの演奏をするのを聴けるのは大発見でした。また普段は地味な緑の下の力持ち的なペック・モリソンも一音一音がくっきりした私好みの演奏でした。



NEW MORNING / JOHNNY COLES

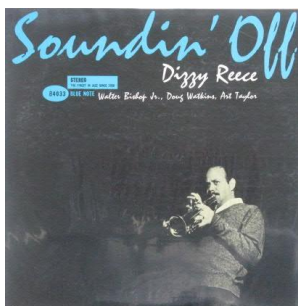
JOHNNY COLES(fl), HORACE PARLAN(p), REGGIE JOHNSON(b), BILLY HART(ds)

SIDE 1) 1.SUPER 80 2.SOUND OF LOVE 3.MISTER B

SIDE 2) 1.NEW MORNING 2.UNITED 3.I DON'T KNOW YET

時代は21年も駆け上がります。このアルバムは1982年の録音で、この間にコールズがどのような活動をしていたかは定かではないけれど、1963年に前述のブルーノート盤を吹き込んだ後はリーダー・アルバムもほとんどなくて地味な活動を続けていたと推測できます。もしかしたらアメリカに愛想を尽かしてヨーロッパに渡ったのかもしれませんが。もっともこれは、レコード偏重主義の日本人の無知かもしれません。

このアルバムはオランダの“CRISS CROSS”レーベルから出されています。そして20年余の歳月は、コールズにフリーゲルホーンへの変化をもたらしました。この楽器の柔らかな音色がコールズには合っているかもしれません。とはいえ、先のエピック盤に比べて演奏内容が若干ハードになりました。リズム・セクションの影響も多分にあるのでしょう。そして良い悪いはともかく、全6曲中3曲も自分のオリジナル曲で録音に臨んでいるほど、意気込みを感じます。エピック盤の「ROOM 3」も彼の作曲でした。この人は作曲が好きだったのでしょう。



SOUNDIN' OFF / DIZZY REECE (BLUE NOTE)

DIZZY REECE(tp), WALTER BISHOP Jr.(p), DOUG WATKINS(b), ART TAYLOR(ds) 1960年5月12日録音

SIDE1) 1 A GHOST OF A WHILE 2.ONCE IN A WHILE 3.EB POB

SIDE2)1.YESTERDAYS 2.OUR LOVE IS HERE TO STAY 3.BLUE STREAK

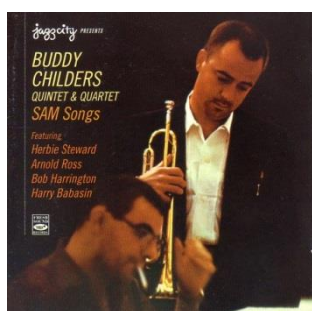
ディジー・リースはジャマイカ生まれでロンドンやパリで育ち、イギリスでの初レコーディングをしています。音色の艶やかさはクリフォード・ブラウン直系と感じました。ですから正確にはアメリカのマイナーなトランペッターではないのですが、ブルーノートに足跡を残しているということで紹介します。

ブルーノートのアルフレッド・ライオンはこの人をこのレーベルの目玉に育て上げよう

としていたのではないかと感じます。お聴きいただければ分かるように、その奏法は癖がなく、直球一本やりの正統派です。変な受けを狙ったフレーズがないことも好感が持てます。

これは受け売りですが、ライオンは新人にリーダー・アルバム吹き込みのチャンスを与えるときに、必ずオリジナル曲を書かせて、吹き込ませるかどうかが判断したようです。B面3曲目の曲は、見事に合格したのでしょう。

余談ですが、ウォルター・ビショップ・ジュニアのソロではレッド・ガーランドが得意としたガツンガツンした左手のブロック・コードと、コロコロ転がる右手のメロディーが聴けて微笑ましいです。



SAM SONGS/BUDDY CHILDERS (FRESH SOUND FSR-2205)

BUDDY CHILDERS(ds) ARNOLD ROSS(p) HARRY BABASHIN(b) BOONE STINES(ds) 1956年録音

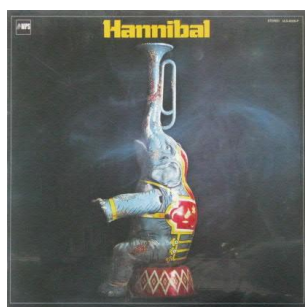
1.BUFFY 2.YOU CALL IT MADNESS 3.HOLIDAY HOUSE(Take 1) 4.IT'S GOTTA BE HAPPY 5.YOU GO TO MY HEAD 6.INDIANA 7.BERNIE'S TUNE 8.HOLIDAY HOUSE(Take2)

また無責任なタイムマシンネタです。もし私が50年代後半にタイムマシンで行けたとしても、ブルーノートやプレステッジなどの若手プレイヤーと酒を飲みたくないです。

「てめえ、なんであの時ワンコーラスもアドリブを多く吹きやがって!!」「おめえこそ、変なところで変なコードを突っ込んでくるんだ。やりにくいんだ、バカやろー」と楽しくない酒になりそうです。それはそれで熱い雰囲気は嫌いではないのですが……。でも西海岸で飲めば、事情が違いそうです。この人と飲めば、酔ってきても、「じゃあ我蘭堂ちゃん、気持ちいいから1曲吹こうかね」といういい感じで飲めそうです。

バディ・チルダースについて、詳しいことは訊かないでください。ライナー・ノーツを読む限りでは、1943年に弱冠16歳でスタン・ケントン楽団に参加して、この世界にデビュー。以来ビッグ・バンドやダンス・バンドで演奏していたが、1954年に自己のコンボを結成して、アメリカの西海岸で活躍した人らしいです。

このCDはおそらく2枚のLPレコードを1枚にしたお徳用盤。クインテットとカルテットの2枚ですが、本日はカルテット盤から2, 3曲ご紹介します。



HANNIBAL/HANNIBAL MARBIN PETERSON(MPS)

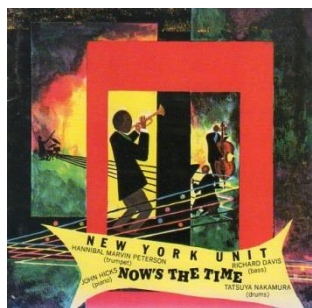
HANNIBAL MARBIN PETERSON(tp, 琴, vocal)、MICHAEL COCHRANE(p)、STAFFORD JAMES(b)、THANBO MICHAEL CARVIN(ds, per, vocal,)

1975年7月1日2日録音

SIDE1) 1. RABBIT 2. REVELATION 3. MISTY

SIDE2) 1. THE VOYAGE 2. SOUL BROTHER

この人の、このレコードを最初に聴いたときは「嗚呼、これでジャズが変わっていく」と子供ごころにも真剣に思ったものです。コルトレーン以降の次世代ジャズだと思いました。ハイパー・ハードバップの到来かと、期待したものです。でも流れは変わらなかった。



NOW'S THE TIME / NEW YORK UNIT (KING KICJ108)

中村達也(ds)、HANNIBAL MARVIN PETERSON(tp)、
JOHN HICKS(p)、RICHARD DAVIS(b) 1992年3月15日
録音

1. NOTHING EVER CHANGES MY LOVE FOR YOU

2. IN A SENTIMENTAL MOOD 3. NOW'S THE TIME

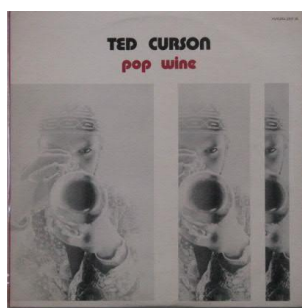
4. SMOKE GETS IN YOUR EYES 5. SOUTH OF THE

BORDER 6. ONLY YOU 7. TURQUOISE 8. GLORY GROLY HALLEUJAH

9. WHEN THE SAINTS GO MARCHING IN

中村達也という 1945 年生まれのドラマーがいます。80 年代後半頃からでしょうか、ニューヨークに渡って、ファラオ・サンダース、ジョージ・アダムスなどと活動していましたが、「NEW YORK UNIT」というグループを結成して何枚かの CD を日本のキングレコードに残しています。当時キングは「日本ジャズ維新」と称して日本人ジャズの啓蒙に努めていました。その話は別の機会に譲るとして・・・。

『Nothing Ever Changes My Love For You』。このマービンの躍動感ぶりが大好きです。どこで聴いたか忘れたけれど、この CD を数年間に亘って探しました。



POP WINE / TED CURSON (FUTURA GER 26)

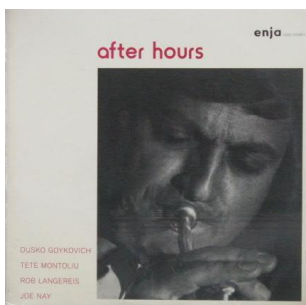
TED CURSON(tp)、GEORGES ARVANITAS(p)、JACKY
SAMSON(b)、CHARLES SAUDRAIS(ds) 1971 年録音

SIDE 1) 1. POP WINE 2. L.S.D. TAKES A HOLIDAY 3. SONG
OF THE LONELY ONE

SIDE 2) 1. QUARTIER LATIN 2. FLIP TOP

テッド・カーソンという人を、どのように形容していいかわかりません。少しフリージャズ系なのかと思えば、マジにハードバップを演奏することもあります。いつの間にかヨーロッパに渡っていました。そしてまたヨーロッパのピアニストは油断も隙もないです。甘美なピアノ・トリオで浮かれていると、突如として荒れ狂うことがあります。このジョルジョ・アルバニタスも例外ではなく、テッド・カーソンを煽りにあおります。そのあたりが聴きどころであります。

【ヨーロッパのトランペッター達を忘れたら怒られる編】



AFTER HOURS/DUSKO GOJKOVICH(ENJA 2020)

DUSKO GOJKOVICH(tp) TETE MONTOLIU(p) ROB LANGEREIS(b) JOE MAY(ds) 1971年録音

SIDE 1) 1.LAST MINUTE BLUES 2.A CHILD IS BORN 3.OLD FISHERMAN'S DAUGHTER

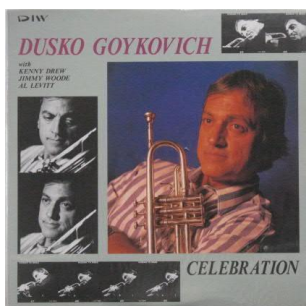
SIDE 2) 1.REMEMBER THOSE DAY 2.I LOVE YOU 3.TEN TO TWO BLUES

ゴイコヴィッチの人気は1970年代後半から、ジャズメディアではなく、ジャズ喫茶から広がったといわれています。レコード会社と表裏一体のジャズメディアでは、ゴイコヴィッチを売り出すことはできなかったのでしょう。

さて「OLD FISHERMAN 'S DAUGHTER」。この何とも形容しがたい、美しいミディアム・バラードを語ることは困難です。

春まだ浅き、朝もやに煙るアドリア海。一隻の古びた漁船がポンポンとエンジンの音を響かせながら静かに波の上をすべっている。その舳先には、あろうことか純白の花嫁衣裳に身を包んだ娘が坐っている。どうも、そんな情景が浮かんできってしまう名演奏です。

ご存知、K J F C北海道支部長のテーマ曲。先日「OLD COLLETER 'S DAUGHTER」とメールを送ってやりました。彼は、娘さんの結婚式の時にはボロボロ涙を流して会場を水浸しにするだろうな。



CELEBRATION/DUSKO GOJKOVICH(DIW 8016)

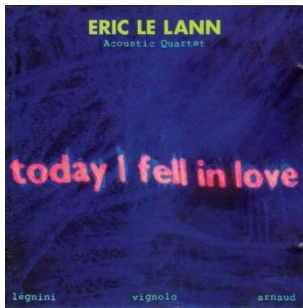
DUSKO GOJKOVICH(tp) KENNY DREW(p) JIMMY WOODS(b) AL LEVITT(ds) 1987年録音

SIDE 1) 1.CELEBRATION 2.INGA 3.NELLA 4.BLUES IN THE CLOSET

SIDE 2) 1.NEW BOP THEME 2.DOBOY 3.RECADO BOSSA NOVA 4.EASY LIVING

もう一枚ゴイコヴィッチを掛けます。このDIW盤も目立ちませんが良い盤です。

ゴイコヴィッチの魅力・人気を以前に考えたことがあります。うまく説明できないのですが、アメリカ系のトランペッターにない哀愁感があって、それが日本人の琴線に引っかかるのかと思いました。例えば、この「リカード・ボサノバ」を聴けば、あのハンク・モブレイなどの演奏がリオのカーニバルだとしたなら、どこか控えめな盆踊りという印象を受けます。そして「イージー・リビング」の切々としたバラード演奏は、やはりアメリカ系のプレイヤーとは一味違って聴こえます。



TODAY I FEEL IN LOVE/ERIC LE LANN((TWINS 4)

ERIC LE LANN(tp), ERIC LEGNINI(p), REMI VIGNOLO(b),

JEAN-PIERRE ARNAUD(ds) 1996年録音

1.TODAY I FEEL IN LOVE 2.UNKNOWN TOWER 3.IS IT WONDERLAND 4.MY FUNNY VALENTINE 5.LE BLEU D'HORTENSE 6.429 RUE PARADIS

7.I FALL IN LOVE TOO EASILY 8.SO WHAT 9.THE THEME 10.LOLA

エリック・ル・ランという人もよく分かりません。あまり深く追求しないでください。

10年以上前、ヨーロッパ・ジャズに興味を持っていた時に買った CD です。ル・ランはベテランらしいが、ピアノのエリック・レジニーニもいいと思いました。

1曲目のタイトル曲など、ジャズらしい“気だるさ”があって、好きです。こういうことを言うと、またイエローカードが出そうですが、何も予定がない週末の午後。家人が出払っていて、好きなことができる時。少し濃い目のオンザロックのグラスを片手に、グダグダとしたい時に最適なアルバムです。私でも、たまにはこういうジャズを聴きます。



BELLA/ENRICO RAVA

ENRICO RAVA(tp) ENRICO PIERANUNZI(p) ENZO PIETROPAOLI(b) ROBERTO GATTO(ds)

1. BELLA 2. MY FUNNY VALENTINE(1) 3.SO NEAR 4.SECRETS 5.MY FUNNY VALENTINE(2) 6.FREE TUNE

エンリコ・ピアラヌンツェというピアニストについて。この人の名前は、日頃ヨーロッパ・ジャズに関心がない方でもご存知かと思います。おそらく今世紀になるかならないかという時期から関西の澤野工房が先駆けとなって、ピアノ・トリオを中心としたヨーロッパ・ジャズが紹介させるようになったと記憶しています。ひとくちにヨーロッパ・ジャズといっても東欧・北欧・南欧などの地域性で多岐多様・種種雑多なジャズがあります。そのなかでピアラヌンツェは古くからキャリアを積んできたようです。

ここまで書けば、感の良い方はお気づきのようですが、実はエンリコ・ラバについてはほとんど知りません。この CD にしても、数年前に KJFC の例会で“動物ジャケット特集”か“猫特集”があった時に、たまたま見かけて購入したにすぎません。

現在の心境としては、あまりラバには近づきたくないのです。下手すると深みにはまりそうで怖いのです。

【日本のトランペッター】



ALONE, ALONE AND ALONE/日野皓正 (日本コロムビア)

日野皓正(tp)、大野雄二(p)、稲葉国光(b)、日野元彦(ds) 1967年11月16日17日録音

SIDE 1) 1.ALONE,ALONE AND ALONE 2.SOULFUL

SIDE2)1.SUMMERTIME 2.DOWNSWING 3.B-LUNCH

日野皓正も毀誉褒貶があるプレイヤーだけど、いわゆる“ポンジャズ”(日本人ジャズの蔑称)とさげすむことなかれ。この2曲を聴いていただければ、日本人独自の感性と覇気に溢れているとご理解いただけるかと。



FOR LOVERS/土農塚隆一郎(OMEGATOKI OMCZ-1017)

土農塚隆一郎(flh) 板垣光弘(p) 吉木 稔(b) 宇山満隆(ds) 2004年録音

1.BEAUTIFUL LOVE 2.GRANDPA 3.SCANDAL

4.ESTATE 5.DEL SASSER

6.CHANGE THE WORLD 7.UNTIL TOMORROW

8.SOLAR 9.LONELY SOUL

10.WITHOUT A SONG 11.AUTUMN LEAVES 12.FEEL LIKE MAKIN' LOVE

「とのづかりゅういちろう」と申します。2002年にデビュー・アルバムを発売してから計4枚のCDを出しています。フリューゲルホーンにこだわっています。なんでこんなに激しく吹くのか分からないほどフリューゲルホーンを吹きます。このアルバムでは、オリジナル曲は1曲だけで、マイルス・デイビスやフレディ・ハバードなどの曲も取り上げて演奏しています。



CLIFORD BROWN WITH STRINGS/CLIFORD BROWN

CLIFORD BROWN(tp), RICHIE POWELL(p), BARRY GALBRAITH(g), GEORGE MORROW(b), MAX ROACH(ds) AND STRINGS NEAL HEFTI(アレンジ、指揮)

SIDE 1) 1.YESTERDAYS 2.LAURA 3.WHAT'S NEW

4.BLUE MOON 5.CAN'T HELP LOVIN' DAT MAN

6.EMBRACEBLE YOU

SIDE 2) 1.WILLOW WEEP FOR ME 2/MEMORIES OF YOU 3.SMOKE GET IN YOUR EYES 4.PORTRAIT OF JENNY 5.WHERE OR WHEN 6.STARDUST

このふくよかなほっぺた。巨大な鼻。突き出たおでこ。そして満面に喜悅な表情を浮かべて楽器と一体になっている。このジャケット写真を見ているだけで、何かほのぼのとした

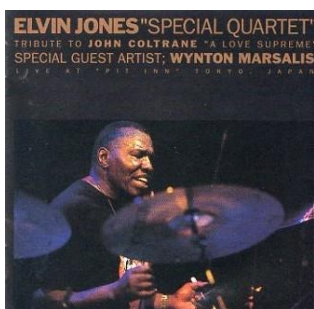
幸せを感じてしまう私であります。ちょっと人間離れた表情だけど、けっして神様とか大黒様とか思いません。これがトランペット・キングの表情だと私は思い込んでいます。

今日はブルー・ムーンを掛けます。これは昨年天国に召された KJFC 元祖歌姫エミちゃんに奉げます。ああ、クリフォード・ブラウンよ。KJFC の歌姫だったエミちゃんのバックを朗々と吹きまくってくれ。

♪BLUE MOON, YOU SAW ME STANDING ALONE

WITHOUT A DREAM IN MY HEART, WITHOUT A LOVE OF MY OWN ♪

【今日は掛けませんが、こんなワンホーン・レコードもあります】



至上の愛/ELVIN JONES(SONY SRCS7376)

ELVIN JONES(ds), WYNTON MARSALIS(tp), MARCUS ROBERTS(p),

REGINALD VEAL(b) 1992年12月3日、4日録音

現在のジャズ・トランペット界は悪くも悪くもウイントン・マルサリスを避けては通れません。そもそもトランペット界はいい人材が早死にすぎました。ファッツ・ナバロ、クリフォード・ブラウン、ブッカー・リトル、そしてリー・モーガン etc.etc. 皆、20代30代で死んでしまった。またまた“たら・れば”ですが、彼らが2000年ころまで生きていてくれたら、と思います。これは、単なる私の思い込みですが、この状況は日本の幕末維新に似ています。吉田松陰、高杉晋作そして坂本竜馬などなどが長命していたら、日本の歴史は変わっていたと想像します。もしかしたら日清日露の戦争もなく、その延長であった太平洋戦争もなかったかもしれません。

とにかく、ブラウンやモーガンらが、せめて1980年代ころまで、そう彼らが50歳代・60歳代になるまで生きていてバリバリ吹きまくっていたなら、ウイントン・マルサリスの存在は違った形になったかと思います。

ウイントンが出現して、唯一よかったのは、きちんとスーツにネクタイを締めたミュージシャンが増えたことです。それまでのGパンにTシャツの演奏スタイルも、確かにジャズっぽかったですが、50年代から60年代初頭のハードバップをこよなく好きな私としては、プレイヤーはバリっとスーツで格好良くきめてほしいものです。

さてウイントンですが、私は“ちょっと違うぞ”と思っています。その“ちょっと”がうまく説明できませんが音色がとにかく綺麗すぎて、計算された音楽のように感じられます。でもこの1曲目の「至上の愛」だけは、コルトレーンとエルビンへの尊敬の念が染み溢れていて、認めてあげようと思っています。皆さんも機会があれば、この48分近くの大作をお聴きください。

BYRD BLOWS ON BEACON HILL/DONALD BYRD(TRANSITIONTRLP17)

DONALD BYRD(tp) RAY SANTISI(p) DOUG WATKINS(b) JIM ZITANO(ds)

SIDE 1) 1.LITTLE ROCK GETAWAY 2.POLKA DOTS AND MOONBEAMS

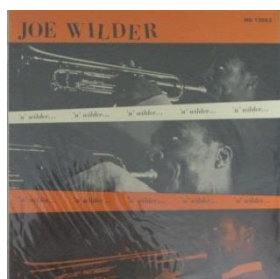
3. PEOPLE WILL SAY WE'RE IN LOVE

SIDE 2) 1.IF I LOVE AGEIN 2.WHAT'S NEW 3.STELLA BY STARLIGHT

1956年録音

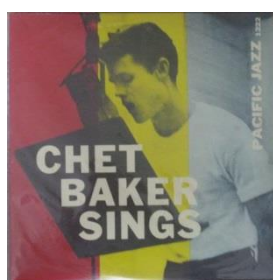
ドナルド・バードも1970年までは正統派?のハード・バッパーだったせいか、ワンホーン・アルバムが見当たりません。ほとんどサクスを加えたクインテット以上の編成しか私の手元にありませんが、唯一あったのが、このトランジション盤です。

内容はデビューしたばかりの弱冠24歳らしく、少したどたどしい演奏が目立ちます。それもまた面白いところでもあります。プロデューサーもアルバム制作上で不安があったのか、A面の3曲目はサンティエシのピアノ・トリオ演奏ですし、B面の2曲目もバード抜きでワトキンスの演奏が大きく取り上げられています。バードにとっては何とも情けないアルバムですが、バードのほのぼのとした演奏が好きです。



JOE WILDER 'N WILDER/JOE WILDER(SAVOY)

「チェロキー」という爽やかな曲が印象的です。ただし、この曲はクリフォード・ブラウンなどの「チェロキー」とは違う気がします。



CHET BAKER SINGS/CHET BAKER(PACIFIC JAZZ 1222)

好き嫌いは、あって当然です。でも一度はお聴きください。この人はワンホーン・アルバムが多かったと言います。もっともこの人の場合には、ヴォーカルという楽器があります。



A JAZZ PORTRAIT OF FRANCO AMBROSETTI/ FRANCO AMBROSETTI

イタリアの「50年代後半のマイルス」です。